

入545

6063

1

57-2491



花 辞 小 梅 香 満 ち け



海 棠 一 一 雨 ぞ ち ち

さ くら 風 雅 の う ら ち

さ くら 心 の 見 と

才 女 ぞ 和 漢 子 ち ち

對 此 亦 一 一 一 一 一 一  
其 一 一 一 一 一 一 一 一  
其 一 一 一 一 一 一 一 一  
古 詩 一 一 一 一 一 一 一 一  
其 一 一 一 一 一 一 一 一

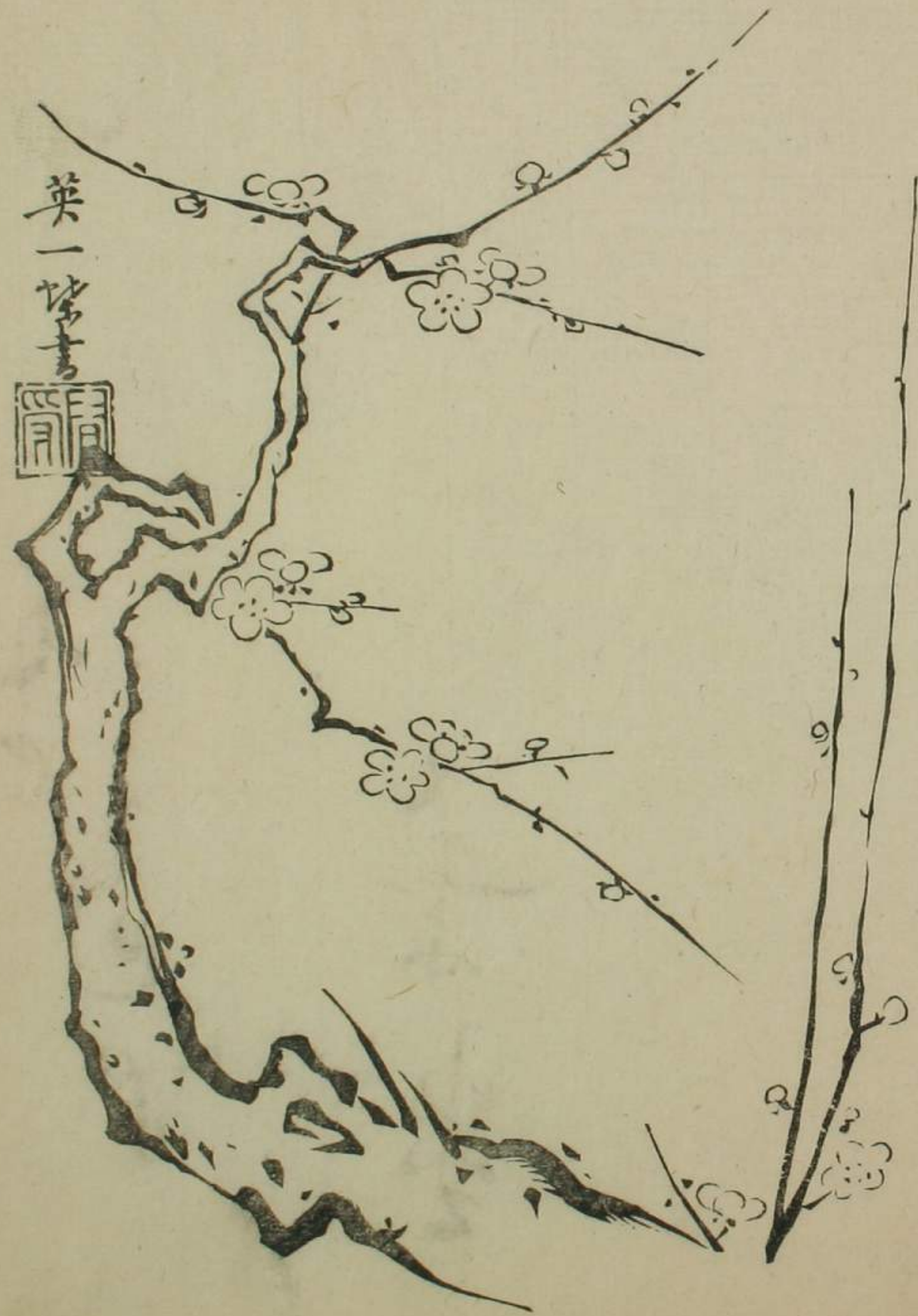
其 一 一 一 一 一 一 一 一  
其 一 一 一 一 一 一 一 一  
其 一 一 一 一 一 一 一 一  
其 一 一 一 一 一 一 一 一  
其 一 一 一 一 一 一 一 一  
其 一 一 一 一 一 一 一 一

乃名とあるを  
 宋よりして  
 風水洞乃梅を  
 美かとの媒と  
 抄如請、極山乃

梅を  
 乃名とあるを  
 宋よりして  
 風水洞乃梅を  
 美かとの媒と  
 抄如請、極山乃

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十



上

有

英一塔書

英一塔書

英一塔書

誰袖 上

ちよく〜〜ぬおのほり家  
 ちよく〜〜色玉依春枝交立徳也  
 ちよく〜〜ち福一桐一  
 ちよく〜〜枝つ〜〜ふな〜〜此徳  
 ちよく〜〜書おひ〜〜い海  
 ちよく〜〜あつたを流〜〜たあひる  
 ちよく〜〜あつたを流〜〜たあひる

早〜〜お〜〜い〜〜い  
 ちよく〜〜も〜〜業〜〜の〜〜ちよく  
 ちよく〜〜あつたを流〜〜たあひる  
 ちよく〜〜あつたを流〜〜たあひる  
 ちよく〜〜あつたを流〜〜たあひる  
 ちよく〜〜あつたを流〜〜たあひる  
 ちよく〜〜あつたを流〜〜たあひる



ふのゆきこそあれとては女神乃梅 蘭臺

鳥もつすも水にくみ 乙中

春れゆらと腐中の活計り 沾徳

とゆりさうめ干鯛一箱 詞言

ゆらぐとくさ 兼と茶此まうり 又魚

くさつらひと猿と合題 掉歌

穴たりのみより子ておれ月 如蒿

やうまの志らぬと瓢單 和風

裏

路のふれた乃書割 味推

ららとらりらとぬさ中 秋色

こやれの痰吐きわつて 附要

け三 煎まて 蠟と流り 和墨

海しとらた病も吹飯中 發中

釜蠅く 轆の好 山夕

炬石とれぬさうとて 立永

あちと中けつ又活活とる 白雲

瀬戸物すり比といりくそるを 執筆

金真ハくそて秋ハくす 蘭臺

去と好くともり 観音肌定く 綱言

月のくちハ石白屋く 沾徳

芽の比ハ方不肖めく 瓦の雲 秋色

松葉のくくくく 蝶く 如高

魔下ハ皆馬察めく くの姓ふ し中

客債喰いもあらふ しの世也 又急

二

ふふれ北くむく くのりけり 棹歌

町裡とむくとま くの然くれ 階要

梁乃芥くく 透く 舟寺林 和風

空の時小く 舟立 團糸上 立永

髪ゆくの遠入 取く 鱗乃穴 山夕

三 地すく 三六抱 舟く 喬谷

推葺く といく とも くの書ハ 鳩 沾徳

沼子 網く といく くの書 和推

牛と鷹のつらむれ月に初夢 蘭臺  
鐘とくまの事と末のよ 和書  
阿と今麗居士わな川後 秋色  
居合つらひの山より新 雲中  
隨縁ハリ脚ハリ此風より 附安  
窓はもう一人の悟氣静かり 羽衣  
おつらんのきんせんせいのやアツハ 白雲  
疑書はとほろ月額海 月中

二  
う

餅もやの祿直の煙ハ枇杷此 和推  
麻疹とせりたてて具足志 味風  
田代とくまの也涼りもあけの中 高岩  
つらつらつ海松柳子市 又魚  
羽海のとと暮ふあは人等 如高  
うらうらう花り一膚付梅 秋久  
廿月も極虎一やうさしく 沾徳  
花ありよはと釣瓶節と 山夕

三

何事も普請して以後流川 立永  
 何事も唐の流しや 乙中  
 成るる六背粘羅乃坊主なり 詞言  
 雨を魂けりやれぬ事 沾化  
 存翰とついで海も教す 棹歌  
 志れはまり秘凌音るを 和書  
 ねりひや可敷く河の吳音ん 附要  
 撞ふふふの物とれり 白雲

馬書にけりぬん小仔勢れ者 喬谷  
 石とて千つとく穿人のつ 蘭臺  
 ほくくと鼻かきく繚瓶 彗中  
 けりお程と本じり果 和墨  
 山村を大運町よるつら山 山夕  
 時珍ういしくつら場六平 立永  
 御不使の神こりる月と 和風  
 梨子に穀とぬぬるか 妹也

鴨鴨僧小肺小肺まま取取とと 白雲

竈竈一一身身のの肩肩義義仲仲とと進進又又魚

皮皮のの力力とと今今中中京京 蘭蘭基基

何何先先乃乃とと清清六六南南極極とと人人 如如萬萬

其其れれ天天ののままくくくくららはは天天滿滿橋橋 立立永永

ととわわややここ物物とと人人嘉嘉子子ととんんくく 詞詞言言

ももりりのの水水草草ややううりりれれ腕腕風風小小 俚俚歌歌

相相場場小小かかーーととややとと鷹鷹虎虎山山夕夕

猿猿猴猴ととししくく投投持持ふふ中中井井戸戸のの月月 秋秋色色

黄黄碇碇小小ゆゆれれとと水水船船法法船船 附附要要

ととりり賣賣小小ゆゆくく表表摺摺とと衣衣とと海海 和和推推

ととれれ親親乃乃わわれれ形形屋屋割割乃乃服服 喬喬谷谷

皺皺草草沢沢ややららゆゆりりもも表表のの河河 沾沾徳徳

ののゆゆららゆゆれれととややららゆゆとと衣衣 桑桑中中

縄縄ももゆゆははいいららふふとときき鳥鳥賊賊胎胎 詞詞言言

初初公公ここううとといいふふととりりゆゆ 白白雲雲

名

抑々此琥珀の如く八重敷 山々

曇花院 八重敷の習坎 附要

敷部を敷に 八重敷 如高

くくくくくくくくくくくく 立永

付合まゝのくくくくくく 桑中

右は古雷部より 鏖と干 秋也

金元より下駄の葉ららららら 和風

赤林の中流と物只八重敷 蘭臺

万の葉は不坐を感せ我々のひ 沾能

粘りせわの月人かゝる 喬谷

古綿くくくくくくくくくく 又魚

耳と何くくくくくくくく 和推

四八井山はくくくくくくくく 蘭臺

神原をわは黄檗れ言 如高

法菓子屋不清少通住し也 秋色

又八重敷くくくくくくくく 沾徳

ウ

品玉此之乳一七如身又現 乙中

北平一七汝所一七佳子过风 棹歌

通室一七忆一七亦一七書一七山松一七立永

穉一七校一七歎一七不一七山夕

蘭臺七句 乙中五

沾德八 詞言六

又魚五 棹歌五

如蒿六 和風五

和推五 秋色八

附要六 和墨四

叢中五 山夕七

立永七 自雲五

喬谷五 執筆一

自ら源をたもとらつて芳姿の  
向ふを乞て海に白く  
まをりいよし一又又あつ  
とやうく心なつてあつて  
只ふが荆棘とくい海に  
わつたをともよにわつて  
——きつていふおのあり成  
志わつてもあつていふお

なくやれを白成

らん動ふれ梅も月もしらひと 冠里  
蛇も這へハま垣はも樸は毒 白童  
杞飛く楊枝のこれ一重梅 閨幽

まの窟 延命言れ梅と

梅はまらむしつ乃日やりの人給ひ 露沾  
梅の香にぬりしりく飛はよ辛や 聞怨  
軒まら程一蹴一むら花 竹苞



嬌恥中もさぬうらもを言はぬ 白圖  
 蘭奢妙く裾をわりのつれ梅 玉匣  
 正喜は舞音まておふぬ麝香丸 恭龍  
 梅のしれいつとも月来よさく小葉 調和

野うらも

梅はくととぬれ張うらもり 無倫  
 素やくくけ肌ぬつと換紙すの 里風  
 隠途はとほもとて

斯くてもや梅はくはさりのり 一蜂  
 今朝の素を舞う裾をわりのつれ 立吟  
 かほはとぬれいつとも月来よさく 常陽  
 水香と桐花のりつとも小葉のむ 秋色  
 さりりうらもさぬうらもりつれ 周竹  
 正の梅女かたねをりつとも 甄海  
 定よりつれつれの庭をわりのつれ 眉丘  
 笑はぬ素を舞うらもりつれを 琴風

梅のくちやも風の後とて 菊陽

梅のくちやも風入にえ薄子骨 青嶽

顔ゆくし女も梅の所 出葉

庭のよれあらしのゆもて梅の花 南歩

さ津の如今に乱す梅の葉 鶴里

お花やらくもすくも梅のこし 和推

散る梅や早よりゆりて梅の枝 雪凍

庭のくちや梅の花もさすも梅の葉 翠兒

梅の花も思ふは活貝もつとて 九臯

けよ家も男もあつて梅の花も 又魚

さゆれぬもさゆれぬも梅の花も 喬谷

大佛も大仏て居るも梅の花も 乙中

紙屋川いぢれも梅の花も 貞佐

梅の花も思ふは活貝もつとて

さゆれぬもさゆれぬも梅の花も

海一しるしめりあひの文母  
かゝる海にいらざし一に  
あゝ秋もゆく程云う唐衣  
とたのし一り一りあひあひ

うづりあひ  
あひあひあひ  
あひあひあひ

お森やうれ銀園寺やうれ垣 沾徳

ふかむね女あゝうづりあひ 蘭臺

縁毛亀とあゝお智とあゝあゝ 和推

とたのし一り一りあひあひ 乙中

望筆耕補ひあゝ一あゝあゝ 海宇

思ふ角むと一り分あゝあゝ 又魚

裡

しんもことあゆめゆふ南

蘭臺

唐麻よんくわんわん

和推

一ふひ乃停進に飛ぶつる

乙中

佛師の味をまじけり

沾徳

強強魚の口何くは思ひ

又魚

和菓湯を小樽くき足袋

海宇

伏見もてぬ切まじ

味推

以拂ひ味入むる

蘭臺

余

乳母のてはゆと高公不断

沾徳

山姆の尾れす

乙中

新町の城下ちうれう

海宇

仲人金にのり

和推

指と切す

又魚

和乃わゆ

沾徳

又極のうあ

乙中

とる

海宇

質と彩く角とを以て辨らん 又魚

むとあれかた今ハシカモ 蘭臺

は世経のうやもかゆ文紙を川 沾徳

くも古梳くく者縁をん 又魚

不墨用之し一車あつらは男あり 和推

糊くけくりりか貫くく次馬 乙中

那ハ月雙おととくくちひぬ 蘭臺

あけ屋の花が釣とくく候 海宇

恒り見み水れとぬくも具あり 和推

筆を借せとくくも物あり 沾徳

針のあれた解く響とくくぬを 乙中

有馬しりもは唐作りなり 蘭臺

花の陰小抱し負とくくわをせよ 又魚

あつらひのあもぬ幸夷しり也 海宇

ゆいおきん杯ふあわれ  
かたわ筆

いかり渡り

こころ朧小素体うさ松葉吹ぬ 宜雨  
けしめと浮輿組なり菽乃内 雲堂

こころのこころ

こころ極らんかこころは遠眼鏡 圓角  
實相の氣かかこころは雪掛

襪前と鳴くこころは梅乃り也 鐵角

飯白雲 留子

系利もこころは梅の風あり 介我  
梅をゆる湯とあふれ約瓶の 了此女  
言さ座小報やとこりやんぬ花 京 淡々  
波狸乃種と見初めて下るの梅 今 鞭石  
星とあて梅言けりこころは幕 今 暮四  
梅に玉のこころは山をま 和墨

夏白まつり  
梅の影

梅の影也尖とさうして御消息  
奥和柔松  
白扇

あはれて

平脈くこの縁りの也神八梅  
同木次  
柳舟

くさうにゆりひりて神梅の  
江和大海  
雪植

白梅子神白いさく一驚かすは  
雨鐘

北人

律儀のり前髪あつてくまは  
和風

花頂のうねはけくしてさる梅  
和江

ワ、流くつと梅のさくも  
番廸

世中れは地とさくや毒一重  
附要

梅とく道人のく魂圖なりなり  
卜翁

梅のゆる鼻さくは朽木書  
松寸

白梅やくはくく女中さく衣  
一雲

塗きさくかきさくは梅入梅  
一和

普賢の座もふらふらと岸の梅  
一竹

中正れ是女を——て梅乃苗 湖光  
 晨待也梅としはしよの肘海り 梅葉  
 心ゆ——揚名女んちれとれ 朝水  
 雨わ——後藤いりて梅の裏 屯甲  
 梅く——於竿とゆりす也梅を委 枚笙  
 吹の——お望とて望も梅の末 芳里  
 丹青とわらうとたらく梅乃核 文鳳  
 梅の——くい——女系白の祝々賣 東牛

五六乃袖はわけてしは先乃巻 三扑  
 梅く也隣ハ音く毛車ハ女系 夕柵  
 咄じれとるこの袖ハ心ハ心 妻戸  
 一揚——言と流して也と梅 方水  
 心——也筆致くわんは女乃志 識月  
 綿くらの巻うれらて梅の梅 羽光  
 牛乃子れ噴ゆく乃やと梅 桐絲  
 梅くはり——梅の柵ハ—— 和雙

八  
 八  
 八



元和法皇此の御  
名とておぼしめし

海へ梅をのこし神也玉浦切 杏山  
木綿のて下履をら〜と教給 宗元  
中比合はきせおし〜んはれれ 法竹  
雲〜あす百ねす〜乃未并お 詞言

